

インドの家政教育

— インドの高等学校家庭科教科書 “Home Science” を資料として —

八幡(谷口)彩子^{*1}・太田優香^{*2}

Home Science Education in India :
According to the High School Textbook *Home Science*

Ayako YAHATA-TANIGUCHI and Yuka OTA

Abstract

Home science education in India is not well known in Japan. Ms. Ota, one of the authors of this paper, obtained the home science textbook *Home Science*, used by high school students in India.

The purpose of this paper is to help understand the status of home science education in India, by using the textbook *Home Science* (Janaki Kameswaran et al. (2004-2005) higher secondary first year, higher secondary second year, Tamilnadu Textbook Corporation).

For this purpose, we translate the textbook written in English into Japanese, analyze the contents, and understand the status, goal and method of home science education in India.

From its Unit 1: Concept of Home Science, the beginning of *Home Science*, we obtained some information about the history, roles, extension education, etc. of home science in India. We understood that home science education in India started as an aspect of agriculture education, and developed not only in formal education, but also in extension education for women and girls.

Key words: home economics education, home science, concept of home science, textbook, extension education, India

はじめに

「ブータン王国における家政教育」について研究を行った峠¹⁾によれば、ブータン王国の教育はインドの影響が強く、今後ブータンでもインドの影響により家庭科が導入される可能性があるという。インドの家庭科については、これまでわが国ではほとんど知られていない²⁾。そこで、インドの家庭科教育について研究したいと考え、調査を行った結果、タミルナード州³⁾の16歳から18歳の子どもが通う上級中等学校の第1学年と第2学年の家庭科教科書“Home Science”を入手できた。

本研究の目的は、この“Home Science”を資料としてこれまでわが国ではほとんど情報が得られなかったインドの家政教育の一端を明らかにすることである。

本研究で資料としたのは、インターネット (URL: <http://www.textbooksonline.tn.nic.in/>) によって入手したJanaki Kameswaran et al. (2004-2005) *Home Science*: higher secondary first year, higher secondary second year, Tamilnadu Textbook Corporation (以下、本研究では“Home Science”と略す)である。

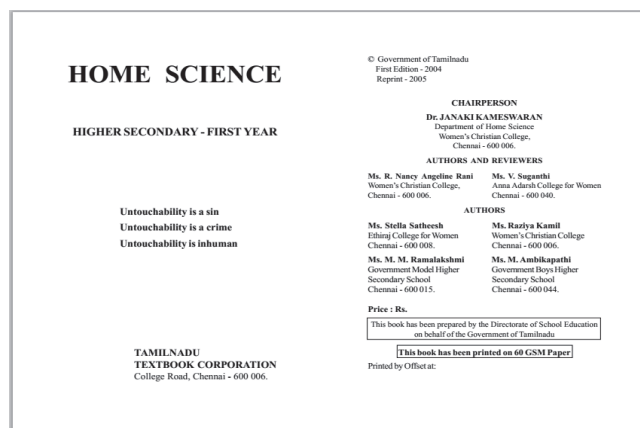
研究を進めるにあたっては、①資料の翻訳を行った上で、②資料の表紙、刊記、目次をもとに、執筆者や刊行状況、内容構成の特徴等の検討を行い、③本資料中の記述から把握できるインドの家庭科教育の目的や方法等について検討した。

なお、本稿では、資料の概要を記すとともに、インドの家政教育の概要を知る上で貴重な資料と思われる、第1学年用テキストの冒頭Unit 1: Concept of Home Science (ホームサイエンスとは何か)の訳文を資料として掲載する。

*1 熊本大学教育学部家政教育学科

*2 北九州市立霧丘小学校

資料1 “Home Science” 上等中等学校第1学年用教科書の表紙



資料 (“Home Science”) について

資料1に“Home Science” 上等中等学校第1学年用教科書の表紙を示している。表紙には、教科名、対象学年、出版社名と不可触賤民 (Untouchability) という言葉があり、教育の平等を謳った記述と解される。

家庭科・家政学の名称は、アメリカなどで用いられる Family and Consumer Sciences, 国際家政学会や日本家政学会が用いる Home Economics など、世界ではいくつかの名称が用いられている。インドや中近東諸国で用いられる Home Science という名称では、生活改善のための指導者や実践者を養成し、生活水準の向上を目指す点に特徴があるとされる。

執筆者は、Dr. Janaki Kameswaran を代表著作者として、他に6名の執筆者が名を連ねる。それぞれの肩書きによれば、女子キリスト教大学 (ホームサイエンス学部) 3名、その他の女子大学2名、政府の中等教育局2名となっている。さらに、本書がタミルナード州政府によって用意されたものであることが記されている。

表紙と目次を除いた本文のページ数は、第1学年

用教科書が324ページ、第2学年用教科書が415ページである。表1には、教科書の目次とページ数を記している。第1学年、第2学年の教科書いずれも Unit 1～7の同一項目名の7単元で構成されている。なかでも Unit 2 : Physiology (生理学) や Unit 5 : Home Management (家庭経営) の割合が高いところに特徴がある。表の項目名からも、日本の家庭科とは教科の内容領域が異なっている。また、日本の家庭科教育では、調理実習や被服製作実習のような実験・実習に関する記述が一定の割合を占めるのに対し、自然科学的で理論的な記述を主体としている。生理学、栄養、生涯発達などの内容の割合が高いところに、栄養不良や衛生面で生活問題を抱えるインド特有の状況が窺われる。

“Home Science” の内容の概要を記すと、Unit 2 : Physiology では、人体の様々な器官や組織、細胞の構造に加えて、骨粗鬆症などの病気について書かれており、体の仕組みを知ったうえで健康を実現するための注意が喚起されている。Unit 3 : Food, Nutrition and Health では、五大栄養素とバランスのとれた食事、Unit 4 : Life Span Development では、

表1 “Home Science” の目次とページ数比率

目次項目	第1学年用教科書		第2学年用教科書	
	ページ数	%	ページ数	%
Unit-1: Concept of Home Science (単元1 ホームサイエンスとは何か)	20	6.2	46	11.1
Unit-2: Physiology (単元2 生理学)	75	23.1	76	18.3
Unit-3: Food, Nutrition and Health (単元3 食物、栄養、健康)	43	13.3	62	14.9
Unit-4: Life Span Development (単元4 生涯発達)	52	16.0	50	12.0
Unit-5: Home Management (単元5 家庭経営)	72	22.2	78	18.8
Unit-6: Fundamentals of Textiles and Clothing (単元6 織物の構造と衣服)	47	14.5	52	12.5
Unit-7: Communication Skills (単元7 コミュニケーションスキル)	13	4.0	51	12.3
References (文献リスト)	2	0.6	0	0.0
合計	324	100.0	415	100.0

幼児期にかかる病気の説明や予防接種を受けることの大切さ、思春期から老年期までの生涯発達、Unit 5 : Home Managementでは、第1学年では住生活について、第2学年では資産管理等の内容が扱われていた。Unit 6 : Fundamentals of Textiles and Clothingでは、第1学年では繊維の科学的特徴について、第2学年では並縫いや刺繍などの製作で用いる実技内容について、Unit 7 : Communication Skillsでは、人間のコミュニケーションの特徴、コミュニケーションを成功するための6つの要素等について書かれていた。どの章にも4つのセクションからなる章末問題があり、基礎的問題から応用・発展的問題へと構成されている。

Unit 1 : Concept of Home Scienceについて

本資料中には、刊行の背景等を記す序文は見られないが、第1学年用教科書冒頭のUnit 1 : Concept of Home Scienceには、ホームサイエンスとは何か、教科目標やインドにおけるホームサイエンスの歴史や役割、ホームサイエンスが学際的・総合的なアプローチ (Interdisciplinary approach) を行うところに特徴をもつ領域であること、多民族国家であるインドでは、国民の統合と国際統合を果たす上でホームサイエンスの意義が大きいこと、とりわけエクステンション教育として社会的に展開していること等が記されている。これらの情報は、日本の家政学原論 (比較家政学) の観点からも注目できる。

本文中には、ホームサイエンスの教科の目標は「家族や他の社会集団の中で共に幸せに暮らそうとする生徒の考え方や道徳的な基準を高めて、家族の幸福を手に入れること」とある。インドにおけるホームサイエンスの歴史については、ホームサイエンスが小学校や大学に導入されたのは1920~1940年のことであり、1960年代中頃から農業大学においてホームサイエンスが教えられるようになり、農業と密接に結びついて展開したことが記されている。インドにおいてホームサイエンスは、フォーマルな学校教育だけでなく、エクステンション教育として社会的に展開されている点にも特徴がある。

なお、第2学年用教科書のUnit 1 : Concept of Home Scienceでは、救護法、けがの手当等に関して扱われており、ホームサイエンスという教科に対する理解を促すものではない。

そこで、インドにおける家政教育に関する貴重な情報を記した第1学年用教科書のUnit 1 : Concept of Home Scienceの訳文を以下に資料として掲載する。

単元1. ホームサイエンスとは何か⁴⁾

1.1 はじめに

ホームサイエンスの指導計画は、ホームサイエンスの専門分野を理解することから始めなければならない。求められるのは、現代的脈絡におけるホームサイエンスの関連性と意義に関する簡潔で端的な説明である。

人々は、よくホームサイエンスは家庭とどのように関連しているのかを尋ねる。この問いは、ホームサイエンスという学問が打ち立てられた基本的な前提を明らかにする。家庭に関する科学は、家族全員が最高に満足のいく生活を実現するために、あらゆる利用可能な人的、物的資源の開発と賢明な運用を通して、人間関係を維持し、豊かにすることと関わっている。

ホームサイエンス教育は、若者たちに、すべての職業のなかでもっとも素晴らしい職である家庭作りの準備をさせる。つまり、少女や少年を、教育、看護、栄養学、研究、福祉、経営、芸術の応用、社会貢献活動やコミュニケーションなど、いくつかの職業のための準備をさせるのである。

家庭を経営する方法としていくつかの方法がある。女性と同様に男性も稼ぎ手と家庭経営者としての役割を担っている。女性が職業人として国に貢献することを可能にするためには、男性が家事を分担することが必要になった。

以下のことを主張する。

1. 家庭は均等な機会を通して両性が発達する場である。
2. 男女両方の個人的、職業的な発達は家庭の範囲内で可能である。
3. 男女両方の役割や標準的規範は、彼らの個人的、職業的な生活に関係している。したがって、男女間の役割における不均衡は避けられなければならない。
4. 家庭経営者としての女性の単次元的な役割は、女性の発達に制約を生み出しており、社会や個人は変化してきており、そのために、家庭経営者という女性の偏った役割は、職業上の役割と融合させる必要がある。
5. あらゆる知識を応用することが基本であり、女性と男性が家庭内外の不当な圧力から自由になるために使われる、家庭内外での過度のプレッシャーから女性や男性が自由になるために使われる原理であり、ホームサイエンスの内容である。ホームサイエンス教育の最終目標は、一人一人が、より便利で満足のいく個人、家族、地域の生活を送ることができるように手助けをすることである。

一般教育は、有能なメンバーとして社会で彼らの地位を占めることができるように、あらゆる点で個人の発達を目指すものである。彼らの能力の発達において、社会集団の中で生活するための個人の発達が強調される。機能的な教育哲学では、“生活を通して生活するための準備をする”と言われる。

ホームサイエンスは、特有な方法でこれらの目的を果たすのに役立つ。それは、生徒が家族や他の社会集団や地域の中で、ともに幸せに暮らす方法の探求に挑戦しようとする考え方を発達させるのに役立つ。

ホームサイエンスは、家族の幸福を実現し、道徳的な基準を高め、経済状況を向上させることをねらいとし、そして、これらの目的は、女性と同様に男性が、個人的にも職業的にも十分に発達することによって達成されるのである。

家庭は生活が始まる場所であり、学校は制度的な教育が始まる場所である。したがって、家庭で生み出されているものは、学校でさらに豊かにされる。

以下は、ホームサイエンスが中等学校の段階で導入される理由である。

- a) 中等教育期は、若い学習者が教育可能な年齢になり、家庭や家族に関して敏感に気づき、そして情緒の安定、受容や所属の感情が必要になる段階である。ホームサイエンスの学習は、こうした情緒の安定を強化し、また家族に対する責任や忠誠心も発達させることができる。
- b) ホームサイエンスは、生徒に自分自身の責任や役割、そして資源を明らかにすることを通して、彼らの家族、地域、民族の中での彼ら自身について確認する機会を与える。
- c) 食、健康、清潔、家作り、身支度、体の部位や性、人生の異なる段階などに関する習慣形成の実践は、このコースを通して学校で伝えられる。
- d) 他者とコミュニケーションをとったり、社会でよく求められる個人に必要とされるすべてのスキルは、ホームサイエンスを通してのみ可能である。
- e) 多くの男子と女子は、インテリアデザインや建築の仕事、ステッチ、料理などに興味を持っている。そして、ホームサイエンスは、これらの生徒たちの希望を満たすのに役立つだろう。
- f) 多くの生徒は、中等教育期で、制度化された教育を無事に終わらせられる。ホームサイエンスのコースでは、生徒が働くために必要とされる情報が十分に授けられるので、この年でさえ、多くの仕事に従事できることを保証する。
- g) 貧困者に対して、奉仕したい気持ちがある生徒は、ホームサイエンスがさまざまな社会貢献（エクステンション）の方法や聴覚的、視覚的な援助

を使う機会を与えるので、彼らの能力のベストを尽くして奉仕活動に取り組むことができる。

- h) 上級中等学校を出た生徒は、非常に拡大した専門分野におけるホームサイエンスを専門分野として選択することができる。

ホームサイエンスの概念を理解した上で、インドにおけるホームサイエンスの始まり、インドホームサイエンス学会の始まりを見ていくことにしよう。

1.2 インドにおけるホームサイエンスの歴史

インドにおけるホームサイエンス教育の歴史は浅い。1920年から1940年の間、インドはイギリスの統治下にあった。家庭科学、家庭工作や家庭経済に関するホームサイエンスは、いくつかの小学校や大学に導入された。インドのパローダは、最も早くホームサイエンスを中等学校に導入した州の1つである。大学でのホームサイエンスの歴史は、1932年、デリーにあるレディーアーウィンカレッジで作られた。1938年当時、マドラス大学は学位レベルでホームサイエンスを認め、チェンナイにおいてよく知られた先導的なホームサイエンスの大学は、1942年にインドの地平線に現れたクイーンメアリーズ大学と女子キリスト教大学である。

ラジャンマル P. デヴァダス博士が学長を務めたコーヤンブトゥールのアヴィナシリンガム・ホームサイエンス大学は、学部から博士課程までのさまざまなレベルで総合的 (interdisciplinary) なコースの拡張に大いに貢献した。

イラーハーバードの農業専門学校もまた1935年にホームサイエンスの免許取得コースを開始し、このコースは1945年に大学レベルの学部となった。他にも1950年から発展している優れたホームサイエンスの大学は、コーヤンブトゥールの大学である。リトアニア、ムンバイ、ウダイプルやティルパティ。1960年代中頃から1970年代に、農業大学はホームサイエンスを教えることの必要性に気づいた。

インドホームサイエンス学会は、フレンミー P. キットレル博士、リーラ シャー博士そしてドロシー ピアソン氏の指導の下、1951年にパローダで、そのルーツが生まれた。学会初の代表者会議は、1952年にチェンナイで開かれた。そこで、チェンナイにある女子キリスト教大学のピアソン氏によって準備された学会規約が承認された。この学会の幅広い目的は、学校と大学におけるホームサイエンス教育の基準を上げ、家庭と家族をより健康でより幸せにすることである。この学会の出版物にインド家政学会誌 (*The Indian Journal of Home Science*) がある。インドのホームサイエンス学会は、国際家政学会に加盟している。

1.3 学際的アプローチ (Interdisciplinary Approach)

専門的なホームサイエンティストは、いくつかの専門分野から引き出された知識を組み合わせることを求められる。このホームサイエンスの学際的アプローチも、専門的な役割が彼らの本質を変化させてきただけでなく、専門的なホームサイエンティストにとっても可能になったため、年々増加してきている。ホームサイエンスの哲学も、個人が家庭を作るためだけの準備をすることよりも専門(職業)的な役割を個人に準備をすることによって変わってきている。今日、ホームサイエンスは、教師、看護師、栄養士、研究者、ソーシャルワーカー、デザイナー、管理者などの専門的職業人を育成することを目的としている。したがって、ホームサイエンスの学際的アプローチは、新しい意義を持っている。

生涯発達または児童発達は、児童心理学、小児医学、ソーシャルワーク、エクステンション、家族福祉、成人教育や栄養学と学際的なつながりを持っている。

生理学は、内科医や神経学、腎臓学、心臓学、皮膚科、整形外科のような異なる専門領域の専門医と連携している。

食物、栄養、健康は、生化学、細菌学、栄養学、内科医、社会的医学などの専門家と学際的な連携を持っている。

家庭経営は、住宅、経営、インテリアデザイン、土壌、構造エンジニアリング、エネルギー、大工、家具の配置などと関係している。

織物の構造と衣服は、繊維化学、織り、繊維デザイン、ファッションデザイン、衣料産業、化学的染色などとの学際的アプローチを有している。

コミュニケーションスキルは、スキル、メディア、広告、エクステンションや情報の普及と連携している。

1.4 国民発展と国際的統合においてホームサイエンスが果たす役割

国民統合は、統一感、理想の生活、共通する行動様式に基づく精神的態度である。インドでは、異なる場所で生活しているさまざまな人々の中に、生活水準、服装、習慣、宗教、食習慣、文化などの顕著な違いを見出す。

地方主義、言語制度、カースト制度、地方自治主義などは絶対的な影響があり、それがインドの社会をさまざまな集団に分断してきた。これに関連して、自分とは別の宗教、言語、地域に属しているすべての人々の信条、習慣、マナーや実践を明確で肯定的な言葉で子どもたちが正しく認識できるようにすることは、両親と教師の義務である。

家族は社会で最初に社会化する集団である。

家族は全ての人類に、最も基礎的で重要な影響を

及ぼす。それは、子どもの基本的なパーソナリティに影響を及ぼすだけでなく、より大きな文化の社会的慣習や価値をも子どもに伝える。そこには、子どもの行動が良いか悪いかを決定する重要な社会心理学的な力が作用している。子どもが学校に入学する時、教師と仲間集団は、子どものものの見方に大きな影響を及ぼす。この脈絡において、ホームサイエンスは、子どもの性格形成や、子どもの思考、概念、感情などを広げる上で、家庭と学校の両方において、重要な役割を果たしている。同様に、子どもは、私たちの国以外の人々と相互に影響を及ぼし合うようになる。これは、子どもが勉強や仕事などで外国に出る時、あるいは結婚や交流プログラムなどで起きる。科学技術やコミュニケーションの進歩により、他の進んだ国々からのとても大きな影響や衝撃がある。この中でメディアは重要な役割を果たす。母親や教師は、子どもに与えられる最高のものを選び、その他のものは無視するように導きながら、正しい道を子どもに教える責任がある。

生活は、十分な栄養、健康、保護的な環境、良い住宅、経営の質や手腕、エンパワーメント、適当な資源、コミュニケーションスキル、高い読み書き能力と熱意なしでは持続させることはできない。これらのすべては、国民発展のためには必要不可欠である。ホームサイエンスは、こうした特質を持つ個人を育成し、それによって、個人とその家族や地域、そして大規模には国家の発展を目的とするなくてはならない学習過程である。ホームサイエンスはまた、子どもたちが地域のエクステンション活動に参加することを奨励し、それによって、子どもたちの社会やあまり恩恵を受けることのない社会、そして、農村や都市部における学校中退に子どもたちが関わっていることに気づかせる。

個々人の生活においてホームサイエンスが果たしている主な役割の一つは、普通教育を通して得られる知識を、普通教育を受けることができない、普通教育の恩恵をあまり受けることのない人々にまで拡大することの必要性に気づかせることである。今後私たちは、エクステンション教育の意味とノンフォーマル教育の方法を理解する必要がある。

1.5 エクステンション教育

教育は、人間生活の社会的・文化的側面における人間の行動変容に望ましい変化を生み出す。“社会の (social)”という言葉は人類に関連することを意味する。エクステンション教育は、個人やさまざまな社会集団、それらの社会集団の内部や相互の関係における社会的な行動を発達させることに努める。

文化という言葉は、社会的に標準化された感じ方

や社会の一員として個人が獲得すべき考え方や行動の仕方を意味する。個人の行動は、文化によって影響を受け、支配され、決定づけられる。エクステンション教育は、文化的な発達を達成するのに役立つ。エクステンション教育の主な機能は、情報を必要としている人々に情報を広めることである。

普通教育は、小学校から始まり大学教育に至るまで、高度に制度化され、年代をおって等級づけられ、階層的に組み立てられた教育制度である。一般的なあるいは基本的な教育は、フォーマルな雰囲気のある普通教育の方法で授けられる。

一方、ノンフォーマル教育は、普通教育の恩恵を受けることができない人々に、選び抜かれた学習の型を特定の下位集団に授けるために、フォーマルな組織の枠組みを構造化、組織化、教育制度化した活動である。これには、学校中退者、若い人も年をとった人も、含むようになるだろう。このために、インフォーマルな教育方法や環境が使われる。

このノンフォーマルな教育制度は、成人教育やエクステンション教育として展開している。それは、次のようなインフォーマルな人間の行動変化の型を引き出すようとしている。

- a) 知識や技能の変化
- b) 態度の変化
- c) 実践の変化

普通教育の制度外の特有な目的は次の通りである。

1. 基本的な目的は、人々の発達である。
2. 知識を授け、人々がより効果的、能率的に仕事ができるよう支援すること。
3. 人々が世界を知ること支援し、相互作用のためのよりよい機会を与えること。
4. 人々がスキルや才能を開発し、生活水準を向上させるための新しい機会を切り開くこと。
5. 人々を社会の中で自立した生産的な市民にすること。
6. 人々の社会的、文化的、知的、精神的な側面をより促進すること。

1.5.1 ホームサイエンス・エクステンション

エクステンションの概念が、ホームサイエンスにまで広がる時、それはホームサイエンス・エクステンション教育と呼ばれる。ホームサイエンス・エクステンションは、ホームサイエンスの領域における科学と科学技術情報の普及を通して、あまり教育の恩恵を受けない人々の行動に変化をもたらすことを目的とした応用科学である。

ホームサイエンス・エクステンションの哲学、これは地域と国家の発展の最も重要な構成員である個人の発達に根ざしている。すべて個人は、彼ら自身の特

性を説明する能力を持ち、これらの問題を解決する過程において彼らは学び、向上し、発達する。ホームサイエンス・エクステンションは、人間のスキルや能力を発達させること、人々のニーズや問題に帰属する適切で重要な情報や知識を広めることを目的としており、彼らの実践に変革をもたらし、個人や地域や国家の発達への階段を彼らが上っていきけるように予め考えられた思考を引き出すことを支援する。

1.5.2 ホームサイエンス・エクステンションの広義の目的

1. 家庭において、すべての個人が、家庭生活の全般にわたって発達することを促進すること。
2. 個人が日々の問題を解決するために利用可能な資源を効果的に使用することを支援すること。
3. 以下のことを通じて、個人の全般にわたる発達を授ける政府や非政府組織の仕事を強化すること。
 - a) 栄養の水準や社会的水準に導く健康、栄養、家庭経営、子どもの発達、権利と責任、最新科学技術とその他の関連情報などの知識を授けること。
 - b) 自らの経済状態や特に女性のエンパワーメントの改善に役立つ、洋服の仕立て方や商品保存、教育的なスキルなどの機能的・職業的なスキルを発達させること。
 - c) 読み書きの水準や生活水準、究極的には地域と国家の発展に貢献する人々の態度や実践に変化をもたらすこと。

1.5.3 ホームサイエンス・エクステンションの特色

1. (いくつかの専門分野を結集した) 総合的なアプローチ (multidisciplinary approach) : つまりその知識の本体は、物理学、化学、生理学、栄養と健康、子どもの発達、織物と衣服のようなあらゆる科学に由来し、さらに経営学、社会学、心理学、コミュニケーション学なども含む。
2. 行動を方向づける : ホームサイエンス・エクステンションは、一連の活動に言及し、それは選ばれたトピックスに関する知識を伝え、対象となる集団がそれを実際に使うために必要なスキルを発達させることを支援する。ホームサイエンス・エクステンション教育は、行動と成果を目指す。
3. 女性と若者に力を与える : 経済状態を改善するために、女性と若者に力を与えることは必要不可欠である。この技術的進歩は共有され、彼らは地域でよりよい地位で自立して働くことができる。
4. その成果には形がない : その態度や知識の変化はゆっくりとした過程と成果であり、すぐには見ることができない。具体的な形のある成果に気づくことが難しいこともあり、プログラムの効果を測定することは難しい。

5. 二方向の過程がある：ホームサイエンス・エクステンションは、高等教育の研究センターと受益者との隔たりを架橋することによって、二方向のコミュニケーション経路を確立する。今では、科学技術は、さまざまなコミュニケーションメディアまたは方法を通して各分野へ移転され、対象となる集団は、彼らの生活水準を向上させるためにそれを使うことの重要性に気づかされている。同様に人々のニーズや問題は、代わりにそれらの解決策を見出す専門家に伝えられ、それは現地で働く人々にも伝えられる。
6. それはニーズに基づいたプログラムである：どんなホームサイエンス・エクステンションのプログラムでも、人々のニーズにおいてのみ存在し、機能を有するだろう。それは長期の、もしくは短期のニーズとなりうるが、これなしではどんな発展のためのプログラムも計画できない。
7. それは家族を指向する：ホームという言葉はまさに家族を意味している。そしてホームサイエンス・エクステンションは、家族の中のあらゆる個人、すなわち老若男女すべての発達をめざす。
8. それは自発的なものである：人々がホームサイエンス・エクステンションに参加することを強制するものではない。彼らは発達段階上のニーズを知らされるが、発達段階を受け入れることと参加することは全体的に人々に任せられる。

普通教育とエクステンション教育との違い (表2)

1.6 政府機関と非政府組織

インドの人口の大部分は農村部に住んでいる。政府と非政府組織は、大半が女性と子どもで構成される貧困地域の発展のためのプログラムを立案し実行するのが主な役割である。これらのプログラムのいくつかは、以下に議論されている。

1.6.1 女性に限定して発達をめざすタミルナードゥ株式会社

非政府組織、銀行、訓練機関、教育機関との共同

で、TNCDWは1983年以降、タミルナードゥ州における女性のためのさまざまな開発プログラムを実施している。

その使命は、社会的・経済的発展のために、集団的行動や段階的スキルの向上を通して女性のエンパワーメントを行うことである。

この会社は次の事業計画を管理している：

1. Annai Bangaru Ammaiyar Ninaivu Mahalir Thittam
社会的・経済的に貧しい女性に力を授けるためのプロジェクトである。
2. 職業訓練プログラム
女性は職業の中で仕込まれ、そのあと選んだ仕事の職業紹介に支援される。
3. 起業家としての開発プログラム
女性に起業化や小さな企業を始めるスキルを訓練する。
4. 女性と青年期の少女たちが個人の健康や世帯の健康、栄養問題にもっと注意を払うことの自覚を高めることを通して、彼女たちに力をつける。

サービスパッケージには以下のものが含まれる。

- ・成長促進
- ・選択的に補う栄養
- ・早期幼児期の世話と就学前教育
- ・栄養と健康教育
- ・健康な人々による健康奉仕
- ・委託サービス

栄養配達サービスのもとで：

補助食 (Sathumavu) は、選ばれた子ども、母親や妊婦に与えられる。5,000人ごとに一つの健康サブセンターが機能している。そのセンターは、交代で農村人口へのあらゆる保健サービスを提供する村の保健師によって管理されている。コミュニケーションの活動は、より広範囲に知識を伝えるのに成功している。

女性のレクリエーションセンターは、農村部の女

表2 普通教育とエクステンション教育との違い

普通教育 (Formal education)	エクステンション教育(Extension education)
1. 教育はおもに学校の校内に限られる。	教育はおもに学校の外で行われる。
2. 学習者は、共通の目標、年齢、学歴経験など均質である。	学習者は多様な目標、年齢や経験などが異質な人々で構成される。
3. 制度上の規範を厳格に指示し、自由な選択はない。	彼らが何を、いつ、どのように学ぶのかなどは自由に選べる。
4. 完遂すべき固定的なカリキュラムがあり、普通教育に付随する学位が与えられる。	カリキュラムは融通がきく。教え方は柔軟性があり、伝統的な方法が行われている。簡単な評価が行われる。学位は与えられない。
5. 知識の流れは、教師から学習者へ。	知識の流れは、教師と学習者相互に観察される。
6. 理論的に始まり、実践的な活動を含む。	実践的な問題解決が理論的な概念に変えられる。

性がくつろいで考えを交流できる場を提供している。

1.6.2 総合子ども開発サービスⅢプロジェクト (ICDS) を支えた世界銀行

タミルナードゥ州総合栄養プロジェクトⅡ (TINP) の継続の際、インド政府は、1998年から5年間の318全区画における効果をあげたICDS計画の実行を承認した。ICDSⅢプロジェクトを支えた世界銀行の特別な目的は以下の通り。

1. 3歳以下の栄養失調を防ぐことが特に重要とされ、0～6歳時の栄養、健康、心理社会的な状態を改善し、家庭における子どもの養育の実践を維持できるレベルに改善すること。
2. 女性（特に妊婦と授乳中の母親）と青年女子の栄養と健康を改善し、態度を変革し、いくつかの健康と栄養に関わる行動の問題に望ましい変化を作り出すこと。就学前教育は、この企画の主要な活動の1つである。さまざまなレベルにおいて、このプロジェクトの観察と評価が定期的に行われる。

1.6.3 社会擁護局

タミルナードゥ州の政府は、困難な環境で見つられた子どもや、世話や治療、社会復帰を必要としている少女や女性の開発のために、サービスを提供する仕事を委託されている。これには制度的サービスと制度化されていないサービスを含む。擁護局は、子どもたちの権利を守り、彼らに適した発達を促すため、すべての計画に非政府組織も巻き込んでいる。

社会擁護局の指導者は、薬物乱用規制と防止のための計画を実行している非政府組織のコーディネーターである。そして資金は、インド政府の社会的正義・エンパワーメント省によって提供される。

このプログラムの受益者は、以下の人々である。

- ・ 育児放棄された子どもたち
- ・ 過失を犯した子どもたち
- ・ ストリートチルドレン
- ・ 虐待された子どもたち
- ・ 行き詰まった少女たち
- ・ 道徳的危機にある女性たちと少女たち

1.6.4 農村自営促進事業 (スワアーナ ジャヤンティ村スワロッガー ヨジャナ (SGSY))

総合農村開発計画 (IRDP) は自営業プログラムから始める予定であった。何年かが過ぎ、いくつかの結合されたプログラムには、自営のための農村青年訓練計画 (TRYSEM) や農村の女性と子どもの開発計画 (DWCRA) などが追加された。これらのプログラムの連携が欠如していたため、インド政府は、自営業プログラムを再編成することを決めた。これらの計画とミリオンウェルズスキーム (MWS) は、SGSYと呼ばれる包括的なプログラムに併合された。

これは、貧しい人々が、信用取引、科学技術、基盤整備の訓練をし、マーケティングを行うことに、貧しい人たちを組織するというような自営のすべての側面を網羅する全体論的なプログラムである。そのマーケティングの産物は“Poomalai”と呼ばれる。

1.6.5 解決策—子どもの労働

国際的な公約—インドは、国連総会で決議された子どもの権利条約を受け入れた。国際労働機関は、子どもの労働を段階的に排除し、子どもを利己的な搾取から守るという過程において重要な役割を果たしている。政府は、2020年までにあらゆる形態の子どもの労働を廃絶することを決めた。実際に、面白く革新的であらゆる仕事を指向する質の高い教育を自由にあるいは手の届く範囲で提供できる教育形態と結びついた貧困撲滅は、ただちに、そしてあらゆる点で効果的に、子どもの労働を廃絶できる。

1.6.6 女性の奉仕活動 (WVS)

この組織の主な目的は、貧しい人々への福祉活動を促進することである。多くの機能的リテラシーセンターは、チェンマイの中または周辺で機能している。それらもまた経済的で開発に関するプログラムを持っている。この組織は、州の社会福祉局によって支援されている。

1.6.7 中央社会福祉局 (CSWB)

このプログラムのもと、子どもや女性、障がい者、高齢者そして病弱者のためのさまざまな福祉活動のための財政的な支援により、現在あるサービスを強化・改善し、局の権限の範囲内で実現する新しいサービスをも始めるべく、任意の寄付によって運営される施設が広がっている。

- I. 子どもへの福祉サービスには以下のものが含まれる。
 1. 子どものための居住施設
 2. ショートステイホーム
 3. 託児所／農村就学前教育 など
- II. 女性への福祉サービス
 1. 貧困者や貧困にある夫に先立たれた妻のための施設や住宅
 2. ショートステイホーム
 3. 家族相談
 4. マタニティーセンター
 5. 職業訓練
 6. リテラシーサービスやレクリエーションサービス
- III. 障がい者への福祉サービス
 1. 多様な障がいのための施設やリハビリテーションセンター
 2. 働く障がい者のための療養所

- IV. 医療施設における福祉サービス
- V. 高齢者や病弱者への福祉サービス
- VI. 治癒したハンセン病と結核患者のためのリハビリテーション

1.6.8 女性と子どものための特別な福祉対策

女性のためのプログラムの主な焦点は、彼女たちの社会的・経済的なエンパワメントを確保することである。この戦略は、女兒に対する体裁を繕った変化、教育、訓練、雇用、支援事業を含み、女性の権利と法律を強調している。

Indira Mahila Yojana (IMY)：女性のエンパワメントを目的とするIMYは、1995～1996年に200区画で開始された。企画委員会の共同研究チームの調査結果に基づき、中間修正として、世代と訓練の構成要素を意識してIMYを作り直すことが、現在の欠点を克服するために承認されている。Mahila Samridhi Yojana (MSY) は、IMYに併合された。

Balia Samridhi Yojana (BSY)：1997年に地域の女兒に対する態度を変革するという特別な目的をもって始められたBSYは、1999年6月にさらに再編された。それ以前、あるいは、1997年8月15日以前に、農村や都市部で貧困線以下の家族に生まれた女兒の母親には、500ルピーの支援金が与えられた。企画の再編の中で、過去に子ども一人あたり500ルピーで送金された支援金が新生女兒の名前で利息を生む口座に預け入れられるようになる。さらに、承認された奨学給付金も同じ口座に振り込まれるようになるだろう。

1.7 成人教育

1988年に始まった国営リテラシー事業団 (NLM) は、15～35歳の年齢集団中1億人に機能的リテラシーを達成することを目指している。NLMの最終目標は、2005年までに十分なりテラシーを達成することである。特別な焦点は、SC/STおよび補習授業の女性たちにリテラシーを向上させることに置かれている。

女性や子どものためのプログラムを分析したあと、人口増加率、識字率、健康状態やその他の関係のある情報に関する統計に目を通してみよう。それらは生徒の皆さんがわが国について一目で知ること役立つだろう。

インドの人口統計学の一般的な特徴

1. 人口は国の面積に対してとても多い。
2. 農村に住む人口の圧倒的な割合
3. 高い人口増加率
4. 需要に比べて低い生産性
5. 低い性比
6. 無職の割合が高い。

7. 低い識字能力レベル
8. 低い栄養状態
9. 不均衡な年齢構成
10. 民族多様性

人口統計2001 (インド)

人口	1,027,015,247
男性	531,277,078
女性	495,738,169
読み書きできる人	
人口	566,714,995
男性	339,969,048
女性	226,745,947

	自然出生率	乳児死亡率
1998	26.4%	72%
2002	23.0%	50%

タミルナードゥ州における貧困線以下の生活をしている人口割合

	タミルナードゥ州	インド全体
1993～1994	35.03%	35.97%
1999～2000	21.12%	26.10%

- ・世界における貧困者の30%はインドに住んでいる。
- ・インドの2,500万人の人々はホームレスである。
- ・1億7,000万人の人々はきれいな飲用水を手に入れる手段がない。
- ・5歳以下の53%の子どもたちは低体重である。

監視可能な対象 (10か年計画)

- ・貧困率を2007年までに20%、2012年までに10%に減少させる。
- ・10か年計画の間に労働力に収益のある仕事を加える。
- ・2007年までに初等教育に誰もが参加できる。
- ・2001年から2011年の10年間の人口増加率を16.2%に減少させる。
- ・2007年までに72%、2012年までに80%に識字率を上げる。
- ・乳児死亡率 (IMR) を2007年までに1000人中45人に、2012年までに28人に減少させる。
- ・妊婦死亡率 (MMR) を2007年までに1000人中20人に、2012年までに10人に減少させる。
- ・森やと木に覆われている場所を2007年までに25%に、2012年までに33%に増加させる。
- ・2012年までにすべての村で、飲むのに適した飲用水を手に入れることができる。
- ・2007年までにおもな汚染された川のすべてをきれいにし、2012年までに、それ以外の目立った川に拡張する。

関連した体験

- 1) プログラムの機能を観察するために、ICDSセンターを訪問しなさい。
- 2) ノンフォーマル教育のプログラムを観察するために成人教育センターを訪問しなさい。
- 3) 以下の内容を理解するために絵や写真を集めなさい。
 1. ホームサイエンスのさまざまな分野
 2. ホームサイエンスと国民発展
 3. ホームサイエンスと国際的統合

問題

セクション-A

- I. 空欄を埋めなさい：
 - a) インドでは () () 百万人の人々がホームレスである。
 - b) 5歳以下の子どもたちの () () %が低体重である。
 - c) NLMの最終目標は () までに十分な読み書き能力を達成することである。
 - d) 2001年の国勢調査ではインドの人口は () である。
 - e) タミルナードゥ州では、1999～2000年の国勢調査で、貧困線以下の生活をしている人口割合は () である。
- II. 以下の言葉を正式名称で答えなさい。
 - a) IMR b) NLM c) CSWB d) WVS e) SGSY

セクション-B

1. エクステンション教育という言葉の説明しなさい。
2. ノンフォーマル教育によってもたらされる3つの行動の変化とは何か？
3. 国営リテラシー事業団が担う役割を述べなさい。
4. 家庭の科学の機能とは何か？
5. なぜホームサイエンス・エクステンションは二方向の過程があるのか？
6. 社会擁護局によって実行された計画の受益者は誰か？
7. 女性の自発的なサービスの目的を説明しなさい。

セクション-C

1. 10か年計画の終わりまでに達成されるであろう6つの対象を挙げなさい。
2. インドの人口統計学の6つの特徴を挙げなさい。
3. なぜバラサワディジャーナは開始されたのか？
4. 子どもの労働の廃絶に向けて働いている組織について書きなさい。
5. SGSYについて書きなさい。

6. 社会擁護局の活動について書きなさい。
7. 女性の開発のためにタミルナードゥ社によって提供されるサービスパッケージは何か？
8. インドホームサイエンス学会について短いメモを書きなさい。
9. インドのホームサイエンスの歴史を強調しなさい。
10. 中等学校レベルにホームサイエンスが導入される理由を6つ答えなさい。

セクション-D

1. 中央社会福祉局について書きなさい。
2. 総合子ども開発サービスⅢプロジェクトを支える世界銀行について書きなさい。
3. 普通教育とエクステンション教育の違いは何か。
4. ホームサイエンス・エクステンション教育の特徴を答えなさい。
5. ホームサイエンスは総合的なコースである。説明しなさい。
6. 国民発展と国際的統合におけるホームサイエンスの役割を議論しなさい。
7. 学校外における教育制度について述べなさい。

注

- 1) 峠小百合 (2014) 『ブータン王国における家政教育』(熊本大学教育学研究科2013年度修士論文)
- 2) インドの家庭科については、村山淑子 (1974) 「世界の家庭科教育の現状 (第1報)」『日本家庭科教育学会誌』15, pp.25-34, 同 (第2報) 『茨城大学教育学部紀要』23, pp.111-120において、インドでは小学校で家庭科教育が行われていることや、佐々井啓 (2004) 『アジアの家庭科教育協力プロジェクト』(報告書)において、インドでは日本の家庭科に相当するものが「モラルサイエンス」という内容で6～16歳の男女に教えられていることが報告されているが、その詳細は不明である。
- 3) 多民族、多言語、多宗教からなるインドでは、教育制度・カリキュラム等は州によって異なる。今回資料を入手したタミルナードゥ州は、インドの最南部に位置し、州の人口はインド総人口の約6%を占める。州都チェンナイ (1996年にマドラスから改名された) はベンガル湾に面するインド有数の世界都市。教育水準は高く、識字率もインド全体の識字率を上回る。タミルナードゥ州の学校教育制度は、5年間の初等教育 (6～11歳)、3年間の上等初等教育 (11～14歳)、2年間の中等教育 (14～16歳)、2年間の上等教育 (16～18歳)、そして高等教育である大学によって構成されている。このうち義務教育は6歳から14歳までの8年間である。
- 4) 訳文中のゴシック体は原文の表記に従った。